



■ビオトープ・サロン 2020年徳島の未来に向けて…みんなの思いを組織の使命に！ No.5

今号も、047号に続いて「2020年徳島の未来に向けて（2010年3月）」の第5弾を紹介します。（編集部）

【5年後の自分】

記者：稲飯幸代（会員）



今年(2009年)、7月にビオトープ管理士会徳島支部に入会させていただきました。携わりたい分野は、環境学習、樹木植物、医療、福祉、これらを統括させたこと。

みなさま、よろしく申し上げます。なかなか大学を卒業できない現実がありますが、現状を楽しみつつ苦しんでいます。思っていたより厳しい現実で周囲の方々のご協力と理解にささえられています。ありがたいことだと感謝しています。しかし、大学も3年を過ぎると少々焦りを覚えつつの毎日です。

というのは、最近やりたいことができ、目下のところそちらに気持ちを引きずられているのかも知れません。本末転倒しないようにしなくっちゃ〜と・・・

得意分野を「携わりたい分野」とさせていただいたのは、医療・福祉以外はまだ経験が浅く、得意と言えるまでにはまだまだ時間がかかるので、これから携わっていききたい分野とさせていただきました。

そこで、テーマの「5年後の自分」は、いささか前置きが長くなったのですが、今の「携わりたい分野」を深めて融合させ、かつ各分野を関連づけた地域の活性化をもくろんでいます。5年後はもっと多くの方に支えられて、地域の方々笑顔に元気を頂きながら、目標に向かって七転八倒しているかもしれません。5年後はもっと苦しんでいるのかもしれないですが、そのために今すべきことをクリアにして、ひとつずつクリアしていきたいですね。（2010年3月）

なので、時間も人も情報も・・・宝物です。

【水環境と水生生物】

記者：吉見準也（会員）

私は会社に入社して以来、水質、大気、土壌、悪臭、騒音、振動など環境計量を主体とした業務に携わってきました。現在では生物調査の担当も行っており、昨年度は「河川水辺の国勢調査」の底生動物調査も実施いたしました。調査を行ないながら河川やダムを見てきました。

このように書くとそれなりに知識があるように見えますが、実は未だ知らないことが多く、まだまだ勉強中です。

職業上、水環境というと水質分析が、水生生物というと定量・定性採集、同定作業が思い浮かびます。ビオトープ管理士会に入会して求められた水環境の知識は主に池や田んぼでの知識、それを人に説明することでした。

私は川や公共用水域が主なフィールドで、これらの知識が少なく自分の勉強不足を思い知りました。また、生物調査では十数メートルもあるダムのさらに数キロメートル上流でヤマトヌマエビを発見して驚きました。稚エビの時にこの程度の障害物を遡上できるという生態を知りませんでした。

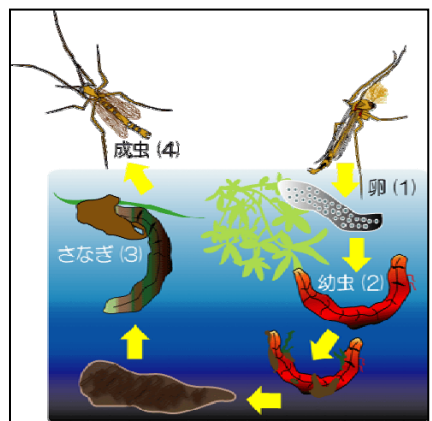
河川などの水環境において事故や異常と騒がれることがあります。本当の水質事故以外に、ユスリカの抜け殻が大量に水面に浮かんだものを油膜と間違えた例、人が死んだ魚を川に投棄したものをみて水質異常とした例など、知識不足や思いやりのなさによるものも見てきました。

水環境においては管理者、事業者など人それぞれの立場で知識を習得し、思いやりを持った行動があれば人と自然が共存し続けられると思います。

今後も山、川、海などで引き続き多くのことを学びたいと思います。10年後もまだまだ知らないことが多いと思います。わずかでも習得した知識が人と自然が共存するために役立つものになればと思います。もちろんビオトープ管理士会でもお役に立てればと考えています。（2010年3月）



ヤマトヌマエビ（出典：MOONLIT SNOW）



ユスリカ（出典：ヤマビル研究会）

■ビオトープ・セミナー 資格試験に挑戦して基礎知識を修得しよう!

ビオトープ管理士資格試験過去問題 出展：(財)日本生態系協会主催「ビオトープ管理士セミナー」のテキストより
無断転載禁止：本紙は公益財団法人日本生態系協会の許可を得て転載しています。(編集局)

【施工部門1級記述問題：正答と解説は次号で紹介】

問 048：水田の圃場整備にあたっては、生産性の向上に視点をおくばかりでなく、生物多様性の保全に配慮することも求められます。生産性の向上と生物多様性の保全とが調和した水田や用排水路などの構造、整備後の維持管理のあり方について、水田や用排水路などを利用している生物の種名を具体的に挙げて、400字以内で述べなさい。

■前号047の解説

1級ビオトープ管理士としてリーダーシップを発揮し、解決のための具体的な方策を、ハードとソフトの両面とも提示する必要があります。

ハード面では、利用できる場所と保全する場所の区別(全体のゾーニング)を行う。整備時には水辺や植生を工夫し、立ち入りができる場所とそうでない場所を視覚的に訴える(安全確保)などがあげられます。

ソフト面では、その地域に関わりのある行政や地域住民、学校関係者、企業、市民団体等によるルールづくりと、継続的なパトロール(環境保全・安全の両面)を実施などがあげられます。

単なる受け売りの知識のみの記述や、合意形成のみに終始している記述では、合格は難しいようです。

※2級はどなたでも受験でき、四国の受験会場は「徳島大学工学部」です。自然環境の保全に関わる方には、是非とも取得していただきたい資格です。詳しくは、<http://www.ecosys.or.jp/> (公益財団法人 日本生態系協会HP)

■ビオトープ・サロン マスメディアからの話題 青のり色落ちの原因と対策

記者：樫本幸実(会員)

【海の栄養不足は下水処理!...ホント?】

11月11日、某国営放送局のニュースで、養殖のりの色落ちが取りあげられていました。汚水が下水処理施設で浄化され、窒素やリンが取り除かれて海に排水されるため、栄養素の供給が減少していることが原因とのこと。生産者は対策として、底地に堆積したヘドロ攪拌し、その下の堆積土を耕転することで栄養素の供給を図ろうと試みられている...との内容でした。このニュースを見られた方は、どのように受け止めたことでしょうか...ふと考え込んでしまいました。汚水を海に垂れ流せば良いのか?...と誤解する方はいないとは思いますが、しっくり来ない解説でした。

「森は海の恋人」という言葉がマスメディアでも取りあげられて久しいですが、牡蠣の養殖業者が豊かな海を取り戻すために、荒れた山を森に再生する活動のキャッチコピーで、山と海が繋がっていることをわかりやすく伝えたいフーズでした。魚付林という言葉も古くからあり、漁師の皆さんに大切に守られていました。

海を豊かにする森の恵み(ミネラル)は、ダムに止まり上流域を富栄養化し、中流域では堰によって取水され浄水場から都市を巡り、下水処理施設で処分されて淡水が海へと排水されている。...このように説明するのは間違い?

■ビオトープ・ナビ 雑学コーナー 失われる生物多様性と消えゆく食文化

(編集局)

【琵琶湖アユ産卵数激減...徳島新聞 2012. 10. 13の話題から】



琵琶湖産のアユ (滋賀県立琵琶湖博物館提供)

クジラ・マグロ・ウナギ、そしてアユまでも!?...秋の味覚の王様マツタケも...生物とともに食文化も消えゆくのでしょうか。左の写真は、徳島新聞記事(2012. 10. 13)から転載したものです。(無断転載四原則を遵守しますのでご容赦ください。)

琵琶湖産のアユは友釣りに適しているといわれ、稚アユとして出荷され国内各地の河川に放流されています。吉野川にも。

この琵琶湖産のアユの産卵数が平年の2%程度に激減しているとの記事でした。

「日本一のアユを取り戻す会」によると、湖産アユにはオオアユになって川に遡上するグループと琵琶湖内に残ってコアユになるグループがあり、このグループが毎年、世代が変わることに交代しているという説があるそうです。

つまりコアユは、産卵が早く孵化した子供は早く大きくなってオオアユになって川を遡上して大きくなり産卵時期が遅くなるので、その子供はコアユになって湖内に残るといえるのです。ただし、各地の河川に放流された湖産アユの仔魚は水温と塩水の関係で降海しても死滅し再生産には寄与できないとのこと。

海産アユにも湖産のような隔年性が起こっているのではないかとこの説がありますが、いまのところよくは分かっていません。海産系アユのなわばりを持つ性格は湖産系よりも強くなく追いが悪いといわれています。成熟が遅く産卵に川を下る時期も遅くなっています。そのため、遡上してたくさんのハミ跡があっても、7月過ぎでないと釣れないのが特徴だといわれています。

ところで、日本の食文化の代表の一つでもある秋の味覚マツタケは?...と調べてみました。環境省カテゴリーでは準絶滅危惧(N T)、愛媛県や京都府のカテゴリーでも準絶滅危惧種に指定されていました。徳島県カテゴリーは、植物の対象は維管束植物に限られていました。とにかく、消えゆく食文化と生物多様性の関わりは深そうです。

■編集後記

ビオトープに関するお役立ち情報のもとより、皆様の活動やお仕事、日常生活を通じて見たり感じたりしたこと、身近な自然の春夏秋冬や喜怒哀楽のご寄稿をお待ちしております。 ふるってご参加ください! 編集局

【E-mail : kanv@nifty.com URL : <http://biotopetokushima.yu-yake.com>】